

復興が目指すインフラの+α

2

後藤新平、「大風呂敷」は縮んだのか？

1923年 関東大震災



松葉 一清  
MATSUBA Kazukiyo

武蔵野美術大学  
教授

大正12年の関東大震災後の「帝都復興事業」は、帝都復興院総裁をつとめた後藤新平が出来もしない「大風呂敷」を広げて、その何割も実現できなかったと言われることがあるが、本当だろうか。今に続く都市基盤整備を、震災発生から短期間で成し遂げた社会のありようとは。

横網町公園

東京都墨田区の横網町公園。「帝都復興」を語るなら、国技館にほど近い、ここを抜きには出来ない。関東大震災当時の呼称は「陸軍被服廠跡」。震災の際、一ヶ所としては最大の犠牲者38,000人を出した惨事の現場だ。公園として整備され、鎮魂のための「震災記念堂(現・東京都慰霊堂)」が昭和5年秋に、続いて悲劇を伝えるための「復興記念館」が翌年に完成した。復興事業の一段落を祝う「帝都復興祭」から間もない時期だった。

これらは、ともに建築史学者でもあった伊東忠太の設計。「慰霊堂」はコンクリートによる和風表現の秀作。一方「復興記念館」は当時流行のフランク・ロイド・ライト流のスクラッチタイル(表面に櫛の歯を引いたような細かい溝がある)で外壁を覆い、密度の高い和

洋折衷を実現している。いずれにも靈魂の存在を暗示する怪獣の装飾が配され、現代の合理主義の建築とは一味違う存在感を漂わせている。

鎮魂の祈りを「慰霊堂」で捧げ、「復興記念館」で帝都復興事業について学ぶ。それは東日本大震災後の復興のありかたを考えるにあたって、わたしは欠くべからざる裨益の行為だと考えている。実際、何度も足を運ぶことによって、震災の被害と復興が実感を持って理解できるようになった経験があるからだ。

「記念館」の2階に、「復興事業」を分かりやすく解説した開館当時の図入りのパネルが展示されている。

復興事業の全体像

「帝都復興事業」は、復興予算が政争の具となって複雑な経緯をたどったがゆえに、今なお全体像の理



写真1 震災記念堂(現・東京都慰霊堂)



写真2 復興記念館

解が広く行き渡っているとは言い難い。内相で帝都復興院総裁をつとめた後藤新平が、出来もしない「大風呂敷」を広げて、その何割も実現できなかったというある種の「俗説」の流布も、それがために払拭できずにいる。

しかし、「復興記念館」のパネルを目にすれば、後藤ら政府当局の立案した復興計画が、東京市の手でどのような形で実現したか、端的に全体像を把握できる。そこを出発点として、今回の東日本大震災の復興事業の議論をするのが、理に適った進め方だとわたしは考えている。

10枚ほどのパネルのなかで、「東京復興事業の内容」と題した1枚は視覚的にも上出来で、帝都復興事業の全体像を端的に伝えている。事業内容を14項目に分類し、予算額の多い順に円弧を描き、そのなかに当該項目の代表的な施設のイラストが添えてある。このパネル自体には予算総額の合算はないが、隣のパネルに総額「7億2,450万円」が掲げられ、その内訳を「東京復興事業の内容」のほうで明示するという展示である。

総額7億2,450万円は、今日の貨幣価値に換算すると、およそ3兆6,000億円となる。昨年末に政府が示した東日本大震災の復興予算が3兆8,000億円だから、ほぼ同水準の予算規模である。その評価はあとに送り、まずは帝都復興事業の内容を見ていこう。

一番大きな円で示されているのが「道路」で、以下を箇条書きにすると次のようになる。( )内は現在の貨幣価値に換算した概算値である。

・道路	3億911万円	(1兆5,040億円)
・区画整理	1億270万円	(5,130億円)
・橋	6,351万円	(3,170億円)
・学校	4,430万円	(2,210億円)
・下水道	4,021万円	(2,010億円)
・運河	2,693万円	(1,340億円)
・公園	2,565万円	(1,280億円)
・電車	2,356万円	(1,170億円)
・中央卸売市場	1,500万円	(750億円)
・上水道	1,000万円	(500億円)
・社会事業	452万円	(220億円)
・病院	310万円	(150億円)
・電灯電力	252万円	(120億円)



写真3 復興2号街路・靖国通りと中央通りが交叉する「須田町交差点」

・塵芥処分 185万円 (90億円)

それぞれに「道路」なら総延長距離147,550間(268km)、「区画整理」なら65地区、942万坪、移転20万3,510棟などの主だったデータも記されている。

「道路」は、昭和通や大正通(靖国通)など22の主要街路における拡幅舗装などの整備が具体的な復興事業の実施だった。その全てが今日の東京の自動車交通の大動脈として生き続けている。「区画整理」は、当初政府の見積もった復興すべき焼け跡全体の広さが1,100万坪だったから、そのデータから9割近くの再開発が実現したことがわかる。また「橋」の項目では、隅田川の大架橋をはじめ、支流や運河に至るまで583もの橋が新設架け替えや改築復旧されたことがデータで示されている。「学校」は、いわゆる復興小学校117校と中学校5校が一気に鉄筋コンクリートで耐震・不燃化された。「公園」は隅田、浜町、錦糸の3大公園の新設整備と、復興小学校隣接の52の小公園が近隣防災の観点から新設された。

わたしは、これらいずれもが十分に「気が遠くなる」ような壮大な数字だと受け止めている。震災発生の大正12年秋から昭和5年3月の「帝都復興祭」まで、わずか6年6ヶ月で達成された実績であるからだ。この数字を知ると、建設に関わる専門家なら、現状の復興の進行に対して、危惧や焦燥感を抱かないわけにはいくまい。先人に敬意を払うとともに、現状の不甲斐なさを率直に認め、そこからの脱却を直ちに模索せねばなるまい。

大風呂敷の果実

なぜ、89年前と現在はこのような「落差」があるのだろう。



写真4 復興橋の「霸王」と称された豪快な意匠の「永代橋」

後藤新平は関東大震災の2年前、東京市長在職時に東京改造「8億円計画」を打ち上げ、出来るわけがないと揶揄され、「大風呂敷」のレッテルを張られている。震災発生直前の8月24日に加藤友三郎首相が急死し、28日に大命降下で首相に指名された山本権兵衛は、二大政党である政友会と憲政会の政治的な駆け引きもあって組閣が出来ず、大正12年9月1日の震災はなんと実質的な内閣不在のもとで発生した。さすがに震災を受ける形で組閣は急速に進み、翌日に後藤新平を内相にあてた新内閣が成立した。「8億円計画」で示した都市への「見識」を社会が認知していたからこそ、山本は後藤に内相就任を依頼したのである。

後藤は焼け跡1,100万坪をすべて政府が買い上げて、抜本的な区画整理と街路計画の実施を意図した予算総額40億円の復興案を閣議にはかった。まさに「大風呂敷」の本領発揮である。しかし、この40億円を掲げる買い上げ案は現実味に乏しいとされ、まず総額は13億円に縮小、さらに帝都復興院の二つの諮問機関による友好的提言と敵対的縮小の動きがあって13億円は7億円、さらに6億円弱に縮み、そこに帝国議会で政友会の修正動議が加わり、最後には4億円台まで削減されてしまった。それを東京市などの自己負担を加えて、先述の「7億2,450万円」となったのが、復興事業の「真の姿」なのである。

そして、すでに述べたように、実際の事業は「気が遠くなりそうな規模」で実現した。当時の芳しくない経済

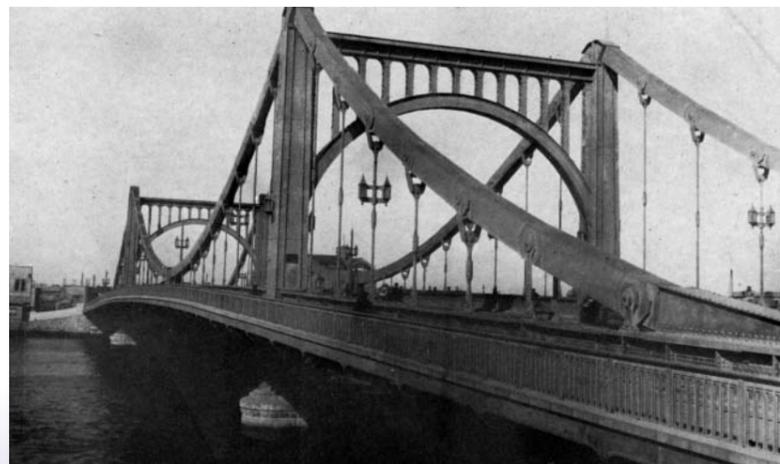


写真5 女性的な美しさを讃えられた「清洲橋」。「永代橋」との対比もよく語られた

情勢(昭和4年は世界大恐慌の年だった)などを踏まえれば、復興の「果実」は十分すぎるものだったと評価してよい。予算額の縮小はあっても、それだけのことをなし遂げうる下地を、後藤らが手がけたことに注目すべきである。

### 後藤新平の人材活用

山本内閣は「バラック内閣」とか、政党に支持基盤を持たない「超然内閣」とかいわれたが、発生直後から摂政の宮だった皇太子(後の昭和天皇)の「御沙汰」「詔勅」を効果的に発

して人心の動揺を抑え、9月16日には国と東京市が国民や市民に対して帝都復興を宣言する告諭を発した。主務独立官庁の帝都復興院が発足したのが、発生から4週間に満たない9月27日。この速度感を目を見張らせる。

後藤は技術官僚の能力も熟知しており、土木技術者の直木倫太郎、太田圓三、また建築の学术界から佐野利器といった面々を、鉄道省などから技監や局長に起用して、復興院の組織を立ち上げた。どこにどんな能力の官吏がいるのか、彼は熟知していたのである。

諮問機関や議会の予算減額の横槍に対して、後藤は弱腰すぎると身内からいわれるほど妥協を重ねた。そして震災発生から3ヶ月、大正12年内に復興事業を軌道に乗せた。自分の打ち上げた「大風呂敷」の落とし所を熟知していたから、妥協を重ねても復興の根幹は揺るがないと確信していたと思えるの



写真6 復興3大公園のひとつ「浜町公園」。現在は園内の設備のほとんどが失われた

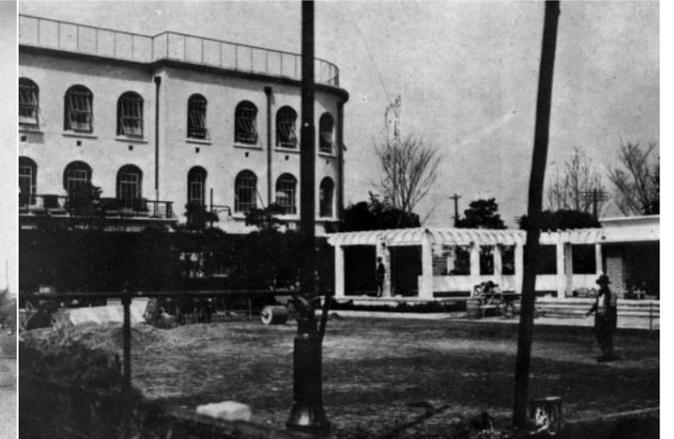


写真7 復興小学校「千代田小学校」と隣り合う復興小公園「千代田公園」

である。だから「大風呂敷」に固執せずとも、「実がとれた」のである。

後藤は台湾総督府時代、医療官僚の立場で公衆衛生に関わったことを契機に都市運営に目覚めた。南満州鉄道総裁就任時に長春で都市計画を実践し、土木建築の技術官僚の能力を駆使する見識を身につけた。その台湾と満州で後藤を抜擢したのが、陸軍一の切れ者だった児玉源太郎だったのは興味深い。明治維新から半世紀、日本は政府の要職にある人物が、次代を委ねうる人材を見出し、きちんと育てる実践の機会を作っていたのだ。

### 新平さんに頼めばエーゾエーゾ

そのような「この人物に委ねる」という社会的な合意は、なにも為政者の側だけにあったのではなく、大衆も例えば「後藤なら出来るだろう」「ここは新平さんに」という気持ちを抱いていたことも忘れてはなるまい。

大正の演歌師・添田唾蟬坊は、震災で下谷の長屋を焼け出され、東北を回って東京に戻り、「コノサイソング」を作った。「コノサイ」とは「此の際」であり、当時の指導者たちが震災を機に、それまで日本で実現できなかった課題をすべて「此の際」帝都復興事業で解決しようとし、後藤も何事につけ「此の際」を連発した風潮を反映している。その「二番」にこうある。

チンチンドン復興院  
鐘だ太鼓だ鳴り物入りよ アラマ オヤマ  
御膳ならべてチンドン  
大きな風呂敷ふしぎな風呂敷 エーゾエーゾ  
のびたりちんだり エーゾエーゾ

この歌詞は悪意の嘲りではない。明確に、好意的な応援歌であり、後藤の資質を大衆が熟知していたことをうかがわせる。また、唾蟬坊の長男で、長く文筆家としても健筆を揮った添田さつき(知道)は、同じ旋律(息子のこの曲が先にあった)の「復興節」でこう歌っている。

銀座街頭 泥の海  
種を蒔こうといふたも夢よ アラマ オヤマ  
帝都復興善後策  
路もよくなる街もよくなる電車も安くなる  
新平さんに頼めば エーゾエーゾ

そう「新平さんに頼めばエーゾエーゾ」なのである。東日本大震災の復興の主務官庁の閣僚が、失言もあって次々と交代したこととあまりにも「落差」がありすぎる。現在の政治が、制度疲労をきたしていることは誰の目にも明らかだ。しかし、嘆きの列に加わるだけでなく、そのような状況だからこそ、専門家はよい意味でのロビー活動にも励み、社会からの信頼と信任を勝ち得て、例え陰からであっても、動きの悪い政治をよい方向に導く社会的な責務を負っている。

海岸線だけで300kmを超える津波被害に「3兆8,000億円」で足りるのか。さらに原発事故も莫大な負荷となって存在している。この数字の専門的かつ理性的な評価を、土木建築の世界から、まずは聞きたいと期待するのは、わたしだけではないだろう。

<写真提供>  
写真1,2 塚本敏行  
写真3~7 「帝都復興史附横浜復興記念史」昭和5年 興文堂書院